

ライマン雑記(14)

副見 恭子¹⁾

ライマンと助手たちⅢ

山内徳三郎

1. 誠実な人

明治24年(1891)11月, 著名な動物学者ジョン・ルー・アガシーの息子, アレキサンダーから, 鉱山視察のため日本へ行くので, 日本人を紹介して欲しいとライマンに依頼があった。彼はライマンのハーバード大学時代のクラスメートで, 当時, 鉱山業, ことに銅山経営に力を注いでいた。快諾したライマンは, 離日後約11年の歳月が流れているので旧知の日本人だがと前置きし, 先ず彼等の名前・経歴・特徴を簡単に認めたものを手渡した。彼の記憶は鮮明で, 例えば, 榎本武揚・大鳥圭介・荒井郁之助を, ミカドの軍と五稜郭で戦い, 敗れて投獄され, 出獄後開拓使に出仕したと紹介している。その中で, 荒井郁之助を博学な数学者で, ライマンの最も好んだ言葉“honest man”, つまり, 誠実な人と称えた。

それから24年後, 大正4年(1915)に再び荒井を偲ぶ機会に巡り合った。助手の一人だった桑田知明の甥, 桑田権平が, ライマンが大切にしているsoy(醤油)が切れるのを知り, ニューヨークにいるArai・Yoneoに頼んだ。それを知らせる桑田の手紙に対するライマンの返事に「Araiの父が私の古い友達だと言うが, まさか私の畏友, 荒井郁之助ではないだろうね」と尋ねている。41年前, オランダ人の女教師に対して無礼な行為を働き広瀬常との結婚を妨害した福住開拓使仮学校女学校掛の罷免(注1)を要請した折, 開拓使で唯一人, ライマンの抗議に虚心で耳を傾け, 真実を語ってくれた荒井を忘れられなかったのだ。至誠は不滅である。

山内徳三郎も兄提雲と共に, 「honest」と書かれた人であった。彼は旧幕臣の良家に生れ, 幕末にフラ

ンスへ留学した提雲と, ロシアへ留学した作左衛門(資生堂創立者)の2人の兄を持ち, 親戚にポンペに医学を学んだ松本良順がいた。19歳の時, 作左衛門と樺太へ旅したり, 良順のもとで会津の救護所で傷病者を看護したりと, 異色な経験をしている。ライマンとの初対面は, 明治6年の春で, 29歳, すでに開拓使の御用掛・翻訳掛として活躍していたので, 当然ライマン北海道地質調査グループのリーダー格になった。写真(第1図)で見ると, 明治初期の日本人としては珍らしく大柄で, おっとりとした印象を受ける。

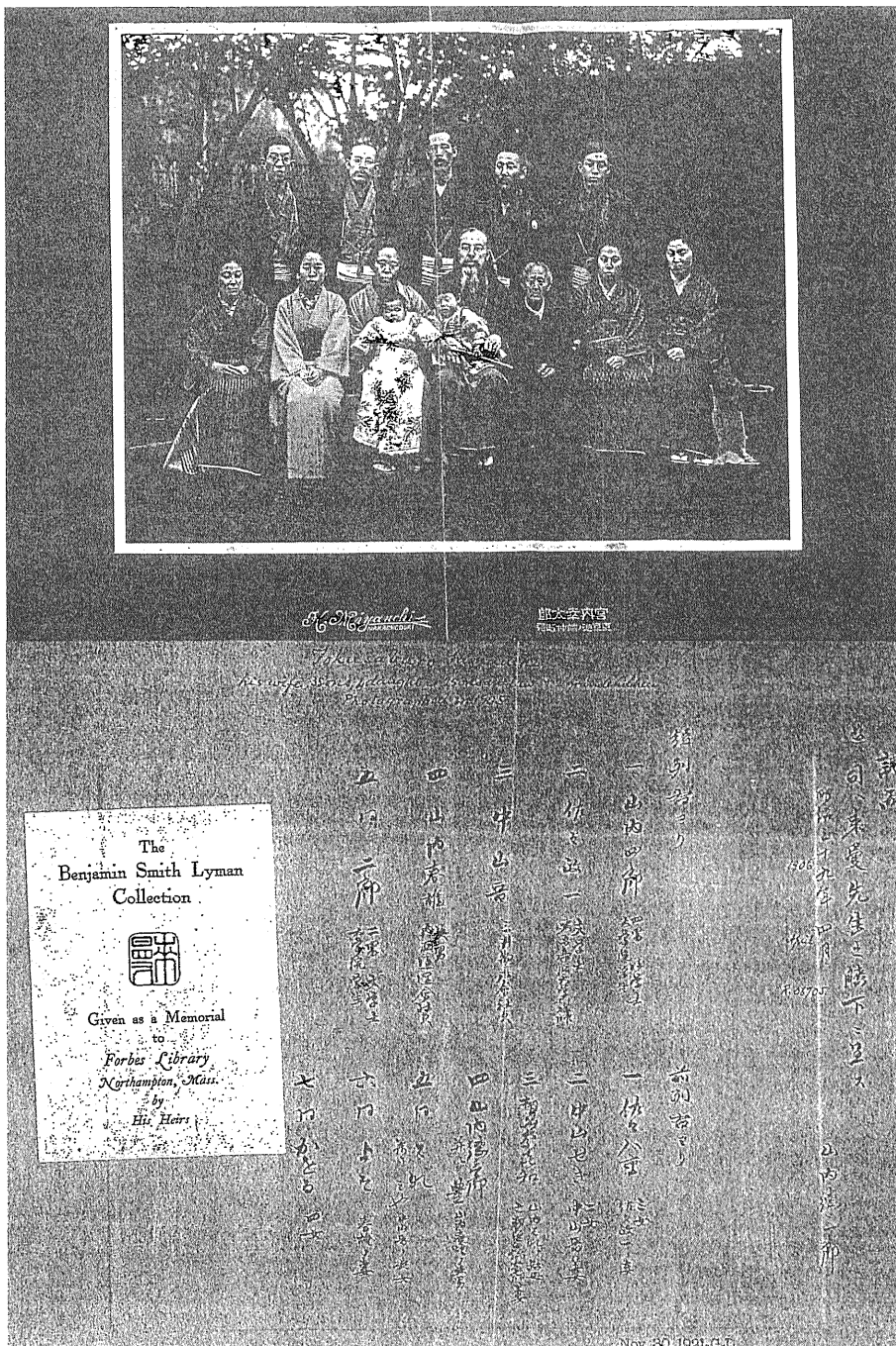
2. 工部卿伊藤博文

山内は持病の眼疾により, 明治8年(1875)3月, 開拓使へ辞表を提出し, すぐ4月に撤回してライマンを喜悅させたが, それも束の間, 5月免職, 7月に内務省勸業寮に奉職した。9月には大鳥圭介一行に加わって, 濃越方面の油田仮調査を行った。観察中, 大鳥と山内共, 油田調査の大任を果たす最適任者はライマン以外に誰もいないと一致したのではあるまいか。両者は蝦夷を見聞した経験をもち, 開拓使のライマン評に動ぜず, 彼の蝦夷地質調査の業績を高く評価していた。当時欧米人によく見られた日本人を蔑視しない彼の人柄も, 見逃すことはできない点と思われる。翌年2月, ライマンは勸業寮で内務省と2年契約をした。

さすが中央政府は, 人権を意識する欧米帰りの人々でひしめき, 近代国家を築き上げようとの意気に燃えていた。第1回油田調査が円滑に行われたのは, 大鳥の寛容, 助手たちの忠実と精励, それにライマンの仕事への情熱による。明治10年(1877)1月11日, ライマンは大鳥に従って工部省へ移った。そして遠江・奥羽さらに再び越後で調査を行い, その後, 琵琶湖まで足を伸ばし, 帰路は甲斐街道を通して帰宅す

キーワード: ライマン, 山内徳三郎, ナウマン

1) マサチューセッツ大学図書館ライマンコレクション委員:
8 Eaton Court Amherst, MA 01002-2828 U.S.A.



第1図 山内徳三郎と家族(マサチューセッツ大学図書館蔵).

ると、江戸では工部省との契約交渉が待っていた。

次の地質調査の構想は実に大きい。“The geological survey of Japan”と呼称し、中国・九州・四国・近畿と調査地域を広げた。これまでの調査を加えると、殆ど日本全国の地質調査となる。過去2年の調査報

文と「日本蝦夷地質要畧之図」に劣らない色刷の油田地質図作成の計画もある。また、工部省が大いに期待している越後での石油の試掘の計画もあった。その上鉦山図を作るため、助手たちを釜石・阿仁・院内・佐渡へ派遣する等、盛り沢山なプランで、その草

S. Iwano, Choo, 6/11/1878.

Yamano Goro Sui,
Assistant Minister of Public Works.

Sir:

I have to acknowledge your favor of yesterday afternoon, informing me that the terms used in my letter of the 2nd of this month (in answer to instructions regarding the same) were not such as you had would have expected and that they were inconsistent with more than one of the clauses of my agreement.

I have been somewhat at a loss in doubt as to what point in my letter you found objectionable and, if it was violent or unduly im- polite, I can easily perceive the justice of your further comments, and but beg to assure you that nothing was further from

第2図 ライマンより山尾庸三への抗議書草稿(フィラデルフィア自然科学院図書館蔵)。

案を提出した。そのためか、1年の契約が1年半となった。

年末から始まった再契約の交渉で、増給(1万ドルから1万400ドル)や付加給付が新しく決まって、翌明治11年(1878)1月23日、大鳥が契約書を送りサインを求めたところ、未だ2項目が解決していないと、ライマンはサインを拒否した。助手たちが内務省から工部省へ移る際、給料25円を支払うと口約束をしていたのにもかかわらず、最近まで、該額を払わなかった。その差額を支払うか30円に増給せよと主張する給料の件と、ライマンは誰の指令を受けるかの責任者問題の2項目を検討し、これらの解決を新契約書に書き入れるよう要求した。

開拓使での忌わしい経験の痛手のためか、彼の日本政府への不信には、異常さを感じる。殊に、開拓使の13等出仕に小突き廻され、7等8等出仕に彼の助手たちへの命令を覆された屈辱でノイローゼになったのではないかと思う程、指令責任者について拘泥した。ライマンは指令をする責任者を一人に絞るよ

う強調し、工部省大輔山尾庸三と激しい遣り取りを交わし(第2図)、お互に譲らず、山尾は遂に彼の態度を傲慢で無礼だと詰り、交渉を打ち切った。山尾に工部卿伊藤博文以外の省内コミュニケーションを断られたので、ライマンは致し方なく、山尾への返事を渡してもらいたいと、工部卿に頼んだ。書面で、彼の意見は変わらないこと、如何なる人でも、自分の命令に従えと要求する権利はないこと。また彼には、個人的な悪意は全くなく、ましてや、反抗しているのでもないことを書き連ねた。同時に、伊藤へも苦情を訴えた。

伊藤博文の返事は絶品である。思わず「見事」と絶賛したもの、では何処かと問われると、これと言って特別な文ではない。たゞ気負いなく、ごく自然で、自由自在に思考が文の間を駆け回り、厳然たるものあり、人間の温もりありで、読んでみると、今日のアメリカで話題となっているEQ(感性指数)の高い大器を感じさせる。猪突猛進して権利を言い張るライマンを黙らせ、細部まで契約書に書き入れるよう固執した愚かな態度を、彼に反省させた伊藤博文の力量には一言もない。工部省大丞林董の英訳のうまさも文を引き立てているが、やはり、訳よりも、伊藤博文の人間的魅力が圧倒的である。

契約書が手元がないので伊藤書簡の訳は無理な為、ここで要点を述べると、「ライマンの手紙を読み、大方の難点を契約書から取り除いた」。しかし、敵意はないかと断わり、「指令責任者の問題に関しては、ライマンの解釈通り矛盾を認めるが、個人的で、詳細な問題を取り決める場合、矛盾が生じるのは当然で、責任者唯一人は不可能だ」とライマンの意見に反対した。しかし文末で、「この件で心配する必要はないと思う。もし問題が起れば、私に知らせて欲しい。我々は妨害するつもりは全くない。いやむしろ、あなたの重要な仕事がうまく行くよう、あらゆる便宜をはかりたい」とやんわりと述べて、ライマンの頑な心をすっかり解してしまった。蛇足だが、大正4年(1915)、「40年前、私の日本滞在中、すぐれた英文を書くことができた唯一の日本人は、林董だったが……」とライマンの助手、安達仁造の息子新太郎の英文代筆をほめている。

続いて、助手たちの30円増給の朗報が届いた。ライマンは感激し、すぐ工部省へ伊藤博文を訪れたが、不在だった。8日前、即ち、5月14日、内務卿大久保利通が紀尾井坂で暗殺されたため彼は内務卿を兼任

し、間もなく工部卿を免ぜられたので、契約書の件が彼とライマンの最初で最後の接触となった。

3. 越後油井の試掘

以後、ライマンの運命の星が衰退して行く。先ず、6月4日付の日日新聞(東京日日新聞?)で、新進気鋭のドイツ人、東京大学地質学教授エドムンド(注2)・ナウマンの弟子が、Kawaji(川路)Noboruの変名で、ライマンの調査報告を小っ酷く批評した。ライマンは、粗探しの目で書いた酷評に応酬する必要なしと判断したが、もし政府が応酬すべしというなら、川路の評を英訳していたゞきたいと大鳥圭介に申し出ている。

そして10月に、「ライマン雑記(7)J. P. レスリーⅡ」で書いた大事件が起った。即ち、明治天皇行幸に伴って越後にやってきた工部卿井上馨が、ライマンを通さず、山内徳三郎に油井掘削を命じた出来事である。井上は8月に工部卿に就任したばかりで、ライマンの契約を詳しく知らなかったとか、ライマンが連絡不便な遠地の九州で調査していたとかの理由は弁解で、実際は、山尾・大鳥以下工部省の役人が省の最高地位にある工部卿の命令を至上命令として、服従したのではなからうか? 一方、井上および大鳥は、ライマンを通して、越後で地質調査に従事している助手たちに、試掘に適する地点を報告するよう頼んでいる事実から、両人の胸中に油井掘削の予謀があっ

たとも、また石油採掘は民間事業として発展すべきであると、なかなか掘削にイエスと言わないライマンに対する出し抜き計画の実施とみることもできる。ともかく、ライマンにとっては明白な契約違反で、立腹した彼は直ちに契約書の中の油井掘削責任項目の解除を求めた。

山内徳三郎はライマン了解の上、掘削命令が出たと信じた。即時、油井試掘報告をライマンへ送ったのが何よりの証拠でないだろうか。ライマンの詰問の返事を受け取り、始めて真相を知り、恐れ入った山内は到底自分のブロークン・イングリッシュで十分に心情を表わすことができないと、和文の手紙を添えた(第3図)。くずし字なので読み難いが、幸に、ライマンのため、ふりがなが付いているので、カナを主にし、漢字を補い、山内の真情を伝えたい。句読点が付いていないので、升目を空け読み易いようにした。

「ゴシヨ(御書)ノオモムキ ゴモットモシゴクノギ(義)ニテ ワタクシヨリ クワシクモウシアゲザルヨリ オシカクシソウロウヤウニ オボシメサレソウロウモ ヨギナキギンダイニゴザソウラエドモ」(注釈 大へんご立腹されたお手紙はもつともで、詳しく書かなかったので、隠しているとお思になるのもやむをえないが)で手紙が始まる。次に、要約すると、山内は「先生(ライマン)が承知と信じ、工部卿の命令で掘削を行った。但し、掘削費として6千5百円の話がでた時は納得がい

第3図 山内よりライマンへの詫び状(ペンシルベニア歴史協会蔵)。

かなかつたが、ともかく命令に従つたので、決して先生を蔑ろにしたのではない」とありのままを述べ、最後に、「ナニモ(ナニトモ?) ゴキキヤウ(御帰京)ノウエ モウシアケソロヤウ ツカマツルベク スベテワタク シフユキトトキ(不行届)ノダンハ イクエニモ ゴコウメン(御高免)クダサレタク ネガヒアケタテマツリソロ(注釈:東京にお帰りになつたら、お話いたします。すべて私の不行き届きによります。幾重にも、おわび申し上げます。)」と手紙を結んだ。平身低頭の詫び状だけに、ライマンの憤りが如何に激しかったかが窺われる。

坑井掘削の件で山内と大鳥の説明に大差があつたのか、ライマンは執拗に大鳥に釈明を求めた。埒が明かず、遂に翌年2月14日、井上馨が二人を昼餐に招き、事実を説明し、この事件に終止符を打った。山内の誠実さに、政治家大鳥圭介は参つたことであろう。

4. ライマンとナウマン

ライマンは辞任はできず、勿論再契約の望はなくなり、満期を待つのみになつた。7月7日、追い討ちをかけられるように彼は致命的な打撃を受けた。「ジャパ ン ウィークリー メール」で、エドモンド・ナウマン(注2)が内務省地理局地質課へ移り、全日本地質調査を行うという情報を知つた。この調査を最初に企画したのはライマンではないか。驚駭、満身創痍、万事休したライマンは、これまでのすべての業績が崩壊する音を聞いたに違いない。

ライマンとナウマンはことごとく相反した。1879年に、ライマンは43才、ドイツ、ザクセンのフライベルク鉱山学校で学んだアメリカ人で地質技術者。片や、ナウマンは24才の若さでミュンヘン大学で博士号をとつたヨーロッパの地質学者との自負があつた。東京大学理学部に地質学および採鉱学科が設置されると、地質学者たちからの、博士号がないライマンに対する批判がきびしくなつた。ライマンの月給が8百66円、ナウマンは半分以下の3百50円の差異がよく話題にのぼつた。後年、1891年に東洋学芸雑誌に掲載された「旧開拓使の頃政府大金を投じて米人ライマン氏を聘し、地の地質調査を始めり。然れども同氏は学者の眼より視れば非学者連中にて僅に炭田数所を調査せしに過ぎず、故に独乙人は評して曰く。政府からんの音する黄金(Klingendes Geld)を散して米国人の努力を買いと為せり。」(注3)の無書名記事は、当

Lizjakhu, April 9th 1878.

Benjamin Smith Lyman Esq

Dear Sir,

I herewith acknowledge with many thanks the receipt of the "Fossiliferous and Fossiliferous" and your kind letter. Now I ask you, how that group called "Fossiliferous" by you is characterized? Has it anything to do with certain paleontological facts? I should be much obliged to you if you would send me some information on that point as I do at present not know how to introduce the "Fossiliferous" as an actual member of the "Fossiliferous" rock mass into my studies.

I shall soon inform you how long time it will take to arrive at some thing and satisfactory result by the investigation of the fossils in question but I rather fear that the result will take a longer time as you perhaps might imagine. Before however I can improve spend all my time for these things.

*Expressing once more my sincere thanks for the trouble you have taken in the matter. I am Dear Sir,
Very truly yours,
Edmond Nauman*

第4図 ナウマンよりライマンへの化石の質問状(フィラデルフィア自然科学院図書館蔵)。

時のライマンの高給に不満を持った学者がいたのを語っている。

ナウマンは明治8年(1875)8月17日に来日し、翌年ライマンの助手だったヘンリー・マンローの地位、開成学校の地質学・冶金学を受け継いだ。ライマンとの出会いは不明であるが、彼の1876年6月越後油田地質調査旅立ちに挨拶に訪れた客の中にナウマンの名がある。翌年の暮、彼は化石の権威者ナウマンに蝦夷で収集した化石の鑑定を頼んだ。1878年2月、余暇に調べる条件でナウマンは受諾し、4月に化石登志別グループの特徴につき、ライマンへ質問状を送つた。その返書に記された説明は詳細にわたり、2ヵ月後に日新聞に掲載された川路評「ライマンは化石を顧り

みない」とは全く正反対の印象を抱く。両者の関係はぎくしゃくし、結局、ナウマンの1879年一時帰国により、化石鑑定は放棄された。ライマンは友達のレエスクエセント教授に鑑定を依頼することにし、化石コレクションを彼が住むアメリカ・オハイオ州へ送った。

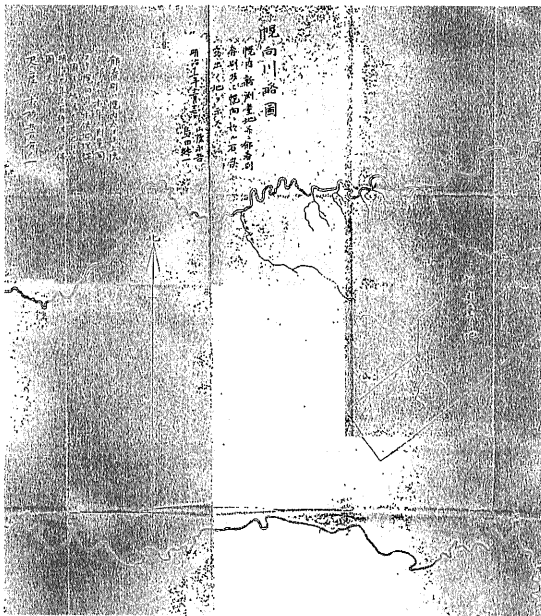
5. 山内徳三郎と北海道炭鉱

満期後、ライマンの身に容赦なく降りかかる冷遇の中で、一番骨身に沁みたのは助手たちの離散であった。先ず、稲垣徹之進が鉱山局へ移り、桑田知明と安達仁造が阿仁銅山へ、山内徳三郎・島田純一・山際永吾が北海道へと移った。明治13年(1880)12月22日、離日する傷心のライマンを横浜で見送った助手は半数以下の寂しさであったろう。しかし、すでに島田と山際が幾春別煤層を発見していたのをライマンが知っていたとしたら、彼にとって、これこそ最高の饒ではなかったかと思わざるをえない。東洋で初めてのジオオロジストを育成しようとの熱望が今や実現し

た。夢ではなかったのだ。

ライマンの念願が充分にかなえられたのは、7年後の明治20年(1887)で、山内徳三郎が主力となって本格的な北海道地質調査が開始され、桑田・坂・西山が参加し、全島を踏査した。そして山内は、やがては、北海道に石炭の全盛期がやってくるのを確信した。折々の山内からの便りで、北海道炭鉱事業が助手たちの協力で伸びて行くのを知り、ライマンはさぞかし本懐を遂げ満足したことであろう。彼が誠実な山内徳三郎と評した目に狂いはなかった。山内は人生の大部分を北海道炭鉱事業に捧げ、彼らしい地道な仕事を遣り遂げた。明治36年(1903)に、「ベンジャミン・スミス・ライマン氏ノ伝」(注4)を「北海道鉱業新報」に連載し、ライマンの北海道地質調査の偉業を不滅にした。山内への礼状で「晩年になって、私に興味を持って下さる日本人の方方がいられるとは!」と驚き、感激し、衷心より謝意を表した。ライマン67歳の時である。

大正9年(1920)9月初め、山内徳三郎はライマンの訃報に接した。1873年以来、ライマン先生を敬慕続けた山内の強烈な思い出は、先生の徹底した天賦人権尊重の実行だったと思う。ある時は日本政府に鋭く抗議し、またある時は開拓使の規則に縛られて、酷使される助手たちに溢れるばかりの温情を注いだ。また筆や半紙を買い求めて、使用人たちに勉学を励ましたことも思い出したかもしれない。彼の眼前に数々の先生の姿が、次から次へと浮び上っては、消えて行ったことであろう。



第5図 幌向川略図(フィラデルフィア自然科学院図書館蔵)。

注1)ライマン雑記13 参照

注2)またはエドムント。「資料御雇外国人」ユネスコ東アジア文化研究センター編のエドモンドを採った。

注3)佐藤博之(1985):ライマンとナウマン百年史の一こま(3)。地質ニュース, no.373, 46.

注4)明治44年(1911)「ベンジャミン・スミス・ライマン氏小伝」としてまとめられた。

FUKUMI Yasuko (1997): A note on Lyman (14) - Lyman and his assistants III.

<受付1997年8月1日>